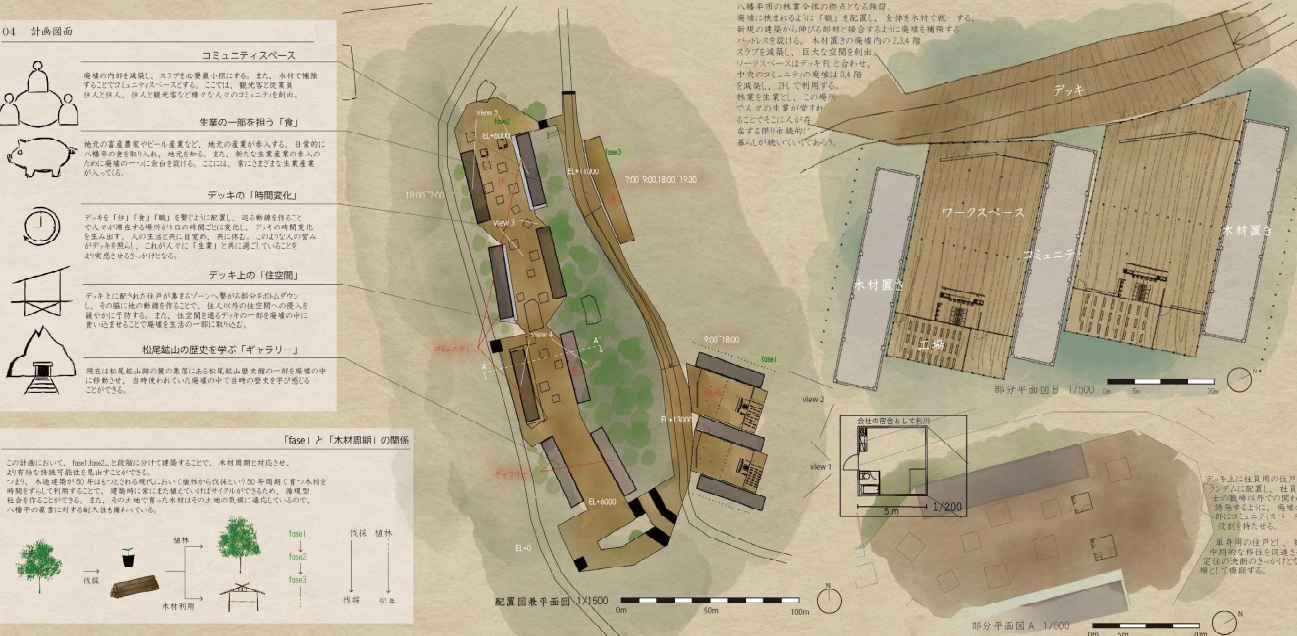


歴史はいつの日か、その実態を抜け、虚構に入れ替わる。このサイクルに、建康も適応するべきである。「生害」と地産の共存の実現。

一言に地産といっても、そこには固有の歴史があり、それぞれの色を持つ。今までの地産は、かつて鉱山産物であったり、当時多くの人が持統探掘という生害と共に採り出し、生害の肉と共に大々消費された。現在では巨大な鉄鋼コヤットでの史跡のように生害が「肉」に代わった。生害は、消費者が自ら選んで食すものから、生害を選択して食すものへの変化している。消費者は生害を「肉」として消費することはなくとも、それを一種格好な食材として約50年のサイクルを持続可能な資源として利用し、林業の拠点と定着する。林業として「生害」と共に生きて、歴史を継承する空間の提案。



1914-1972 炭鉱都市として、石見炭峯(後)が運搬拠点となる山奥地として石見炭峯が主体を管理。この山奥で、密蔵から文化財の発掘まであり、鉱山産業と並行して発展。この山奥で「密蔵」や「密蔵」などがあり、約450人の住民が石見炭峯に暮らし、その家族計約1000人が鉱山集落で生活。当時の日本の新報紙等々が紹介していた「夢上の楽園」と言われ、彼らの日々の暮らしの様子が写った。

しかし、炭産業界が衰退すると、急速に集落は縮小し、多くの人が去る姿を見られた。

写真：石見炭峯の風景

対象とする敷地は宮手峠・八幡平山系松尾の標高約1,000mの山の中に位置し、周囲には豊かな資源を持つ。  
現在は、当時最新の技術で建てられた鉄筋コンクリート造の巨大な躯体に囲われていた。敷地と山、人々の暮らしと自然の調子が合った、民間の企業群を生みだす。  
しかし、その案との主要な部分が山と自然の調子を損なう懸念がある。この法人は、大規模な、安大と、山には見えない山脈に似て見えるべきである。

素材の対比

高床

コンクリート ガラス 木材 コンクリート

人の目線より高くプラインシーローを吊る

プラインシーロー

コンクリート

建築部分全体を位より高きところにて、床平の量産性にも

デッキの形、生業の関係 デッキと周辺環境、再生可能エネルギーの関係

図1 基礎の止水工法（シールド工法）

図1は、基礎の止水工法（シールド工法）を示す3つの断面図である。左側の図は、基礎の断面と地中の水の流れを示している。中央の図は、基礎の断面と地中の水の流れを示している。右側の図は、基礎の断面と地中の水の流れを示している。

図1の左側の図は、基礎の断面と地中の水の流れを示している。中央の図は、基礎の断面と地中の水の流れを示している。右側の図は、基礎の断面と地中の水の流れを示している。

[illegible]